

桜-サクラ-の学習

～宮城県松島湾一帯の地域的特性を生かして～

宮城県立多賀城高等学校
教諭 小川 進

[はじめに]

「桜の学習」は科学の範囲を超えたさまざまな要素を含んでいる。それらは文化的なものから環境問題にいたるまで実に多彩な広がりを持っている。

300 種にも及ぶサクラを5つの野生種からたどっていくと、容易に全容を理解することができる。しかし残念ながら日本では主要な野生種が揃って自生している地域は全国に数カ所しかなく、その多くは山間部になる。幸い宮城県の松島湾一帯は、主要な 4 種類の野生種が自生し、しかも丘陵地帯なために住宅地の法面などにも多数生息している。以下は、塩釜高校及び多賀城高校で 2005 年から 8 年間に渡り、100 時間ほど実践し、教材化した学習プログラムの報告である。

1.教材について

基本となるのが「塩釜神社桜地図」の解説面「日本の桜の分類」である。ここで 10 種類の野生種(原生種)と園芸種との系統を理解する。



2.野生種

この分布を理解するとなぜサクラの学習が地域学習なのかが理解できる。



3.樹形と新目

宮城県でエドヒガンの開花は 4/10～4/20 と二週間ほどの幅があるため開花していないときは「樹形と新芽」から実施する。



4.桜の花の展開

最も桜の授業らしい内容であるが、複数の野生種は開花の時期がずれる。そのために開花がばらついた年には標本収集に苦労する。これらが学校近郊で揃う地域は全国でも珍しい。



5.開花の観察

開花を現場で観察できることは理想であるが、なかなか時間中での実施は困難である。例示した授業はSPPの補助金でマイクロバスを利用できた年度の例である。



6.分布調査

七ヶ浜は「ヤマザクラとオオシマ・カスミザクラ」の分布を短時間で調査観察できる全国でも貴重な場所である。



7.桜の塩漬け

八重桜は野生種ではないが、開花時期が遅いため新学期の授業が落ち着いた時期に実施できる。また桜の塩漬けを家庭も持ち帰らせることで家庭内で桜の話題が生まれることも期待している。



8.結実調査

この学習は神社の境内など園芸品種と野生種が混在している場所で行うと効果的である。生徒は争って探し始めるが園芸品種には種子はできないのでシオガマザクラのサクランボは存在しないのである。



9.ジャム作り

実桜は別として、サクランボは野生種にしか存在しない。ソメイヨシノを含む園芸種は人為的に生息していることを体験的に学習できる。



10.押し葉と葉の観察

押し葉を作成させておくと、荒天で野外実習ができないときに便利である。ここでは「単鋸歯」と「重鋸歯」や葉形が同じ桜でも大きく異なることを理解する。



11.種子の計量

種子を集めて計量することで、葉や花と同様に大きさや形が大きく異なっていることに気づく。また落下している種子はすぐに虫がつき発芽まで至ることが少ないことを観察できる。



12.桜と建設土砂

この環境保全問題は「桜の学習」での到達点である。桜の野生種はスギやアカマツなどの林に混在している。そのために宅地造成や建設土砂などであつげなく伐採される。桜の野生種をわざわざ植樹することはありえないので、野生の桜が混在している環境は、手つかずの自然が残っている可能性が高い。「野生の桜は自然のバロメーター」なのである。



13.紅葉と色素抽出

東北では桜もみごとに紅葉する。ソメイヨシノはどの学校にもあるため、これらかの紅葉から色素を簡単に抽出させられる。



14.社会人講座

2012 年度から「七ヶ浜町歴史資料館」で実施。4月～6月まで6回行う。このような機会を通して、地元の自然環境を科学的に理解し、環境保全に意識をもってほしいものである。



[おわりに]

日本においてサクラは文化となり自然科学の対象から大きくはみ出している。それがために全国でサクラの名木を骨董品のごとくに崇めていながら裏山に散在するヤマザクラには関心を示さない。単なる雑木として伐採される。確かに人為的に植樹されたものではないが、それがために手つかずの自然が残っている証でもある。これら日本のサクラの基本を正しく学習させることは学校教育の重要な部分ではないだろうか？

